

第6回平和市長会議被爆60周年記念総会

分科会Ⅰ

核兵器廃絶に向けた国際的連携
—NGO・各国政府との連携—

2005年8月5日(金) 15:00~17:30

広島国際会議場ヒマワリ

チェアパーソン アラン・ウェア（反核国際法律家協会コンサルタント）

発 言 者 シャンタル・ボービック（ヴァル・ドマルヌ県議会議員・フランス）
 ギセラ・カレンバッハ（欧州議会議員、ライプチヒ市代表・ドイツ）
 アレン・オードゥベール（ヴィトリー・シュールセーヌ市長・フランス）
 エレン・ウッズワース（バンクーバー市議会議員・カナダ）
 アナ・ビセンテ（パルメラ市長・ポルトガル）
 ヘインリッヒ・ニーマン（マルツァーン・ヘルストフル区都市開発担当議員、副区長・ドイツ）
 ピエール・ピラード（ピース・ムーブメント共同議長・フランス）
 ヤニック・ハケ（国際法の壁キャンペーン・ドイツ）
 ジョージ・レーガン（英国非核自治体協会会長・イギリス）
 アスミン・マリカー・アブダル・カリム（カンデー市議会議員・スリランカ）
 マリー・エレン・マクニッシュ（アメリカン・フレンズ・サービス・コミッティー事務局長・アメリカ）
 内藤雅義（核兵器廃絶市民連絡会代表・日本）
 中村桂子（ピースデポ事務局長代行・日本）
 ジョアンナ・ウィンチェスター（国連国際交流協調委員会・アメリカ）
 ダグラス・ロウチ（中堅国家構想議長、元カナダ軍縮大使、元カナダ上院議員）

広島市市民局長 竹本輝男：

皆さん、こんにちは。私は、広島市民局長の竹本です。ただいまから分科会 I を開催いたします。

この会議のチェアパーソンを紹介させていただきます。反核国際法律家協会コンサルタントのアラン・ウェアさんです。ウェアさんは、核政策法律家委員会事務局長や核兵器の使用、威嚇の違法性に関する国際司法裁判所の勧告的意見を導いた世界法廷プロジェクト国連コーディネーターなどを歴任しておられます。現在、アオテアロア・ニュージーランド平和学習財団教育啓発専門家、そして核軍縮議員ネットワーク国際コーディネーターなど、多くの国際平和NGOの顧問を務めておられます。

それではウェアさん、よろしく願いいたします。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

ご紹介ありがとうございます。午後の分科会 I にご参会くださいますありがとうございます。「核兵器廃絶に向けた国際的連携－NGO・各国政府との連携－」というタイトルです。

市の代表、市長の皆様方、そして政府の代表の方、NGOの方々、その他市民社会の方々にご賛同いただいております。市民社会のその他のメンバーとの協力という平和市長会議の趣旨のこつとって会議が開かれております。

議事の進め方ですが、まず、冒頭発言を私からいたします。そして、既に発言のリクエストをしておいでの方15名の一覧を用意しておりますので、皆さん5分ずつ冒頭発言をお願いいたします。それから休憩を取りまして、その後は質問、提案、コメント、議論等々の場を皆様と設けたいと思います。

それでは、まずこの分科会においては、主要なNGO、各国政府の組織、そして市民社会との間で核兵器軍縮、特に核廃絶条約を2010年までに作り、2020年までに核兵器完全撤廃を「2020ビジョン」でもたらず、そのためにいかに協力できるかを話し合いたいと思っております。

平和市長会議が高く評価され、そして認知度が高くなったのは、戦略的な行動をしているからです。行動そのもの、キャンペーンそのものはシンプルで、理想を抱えております。核廃絶です。しかし、その基盤プログラムは複雑です。市や市長が果たす役割を現在の政治環境の中でよく考えながら、行動が取られております。

平和市長会議が、独自に市長が果たす役割に注目をしてもらうために活動することがあります。そして、市や都市、市長の果たす役割が重要視されるわけです。また、場合によっては特定のグ

ループ、特定の支持者と協力をし合うこともあります。そして、それぞれのリンクを強化していくわけです。

一つの例としては、核軍縮議員ネットワークと平和市長会議の協力です。議員と市長の果たす役割を強化し、核軍縮に向けた行動を強めています。また、場合によっては平和市長会議がもっと広い形で横断的に核軍縮に向けて努力をし、行動を取ることもあるわけで、今日は戦略的にこうした異なる行動や協力の在り方について議論をしていきたいと思っています。

また、どのような例が既にあるか、協力・協働的な活動を平和市民会議と他の組織でやってきたその例を考えていき、それをさらに強化したいと思います。他にもいろいろ例がありますが、いくつか私からご紹介します。

まず一つが平和市長会議、それから「アボリション・ナウ！キャンペーン」、そして国際平和ビューローとの間の協力です。これらの協力によって、世界中の市長が平和市長会議の緊急行動に参画することを促してきました。

もう一つは戦略的な仕事です。「アボリション・ナウ！」と中堅国家構想が協力をして、核廃棄に対する戦略を平和市長会議とともに促進したわけです。例えば、一つの例としては、今年NPT再検討会議が行われましたが、国連総会でそれにどのように我々も関わるかということを考えました。

もう一つは、平和市長会議と核軍縮議員ネットワークとの協力です。この二つの組織の間で共同宣言を出したことがあります。これは市長と議員の共同声明ということで、今年のNPT再検討会議で発表されました。これは政治的にも非常に意味のあるものです。というのも、政府が果たすべき役割が、現在の政治的な脈絡の中で書かれています。この声明をまだ支持していない方は、コピーをここに出しておりますので、コピーをお取りください。英文と日本語があります。

もう一つの例ですが、これは英国非核自治体協会と平和市長会議との間の協力もありますし、NPT再検討会議においては、いくつかの政府が、例えばプレス会議やあるいは色々な活動を兼ねたニュージーランド政府が平和市長会議とやりました。

政府との協力ということで、もう一つニュージーランドの例があります。最近ニュージーランドの軍縮・軍備管理担当大臣が、全ての市長に対して、まだ平和市長会議に参加していない場合には参加するように促しました。これはいくつかある例を簡単にご紹介したもので、かなり大きな成功を収めているお手本として出しました。

また、今日の午後の議論の一環として、戦略的にどういう協力があり得るかということ、同じような志を持つ政府、NGOを対象として考えていきたいと思っています。核兵器廃絶をこのNPT再検討会議が失敗したことに鑑みて、どのように促進していくかということです。

例えば昨日、ロウチ大使が中堅国家構想議長として、第6条フォーラムについてお話しされましたが、そうしたことも一つです。また、国連の第1委員会で、核軍縮の審議あるいは交渉を行う委員会を作るという提案も平和市長会議が発表された内容です。こうしたものに対する協力の考え方、在り方も議論していきたいと思います。

それでは、私から、シャンタル・ボービックさんにコメントをお願いいたします。シャンタル・ボービックさんのあとには、ギセラ・カレンバッハさんからコメントをお願いします。ボービックさん、いらっしゃいますか。

ヴァル・ドマルヌ県議会議員 シャンタル・ボービック（フランス）：

ご列席の皆様、友人の皆様、我々はなるべく効率よく、我々の行動を進めなければならない。核を廃止するという事、そのためには力を集め、そしてなるべく多くの人たちを集める。したがって、自治体は住民と近い立場にあるということで、また市民に対しても特別な責任を果たすという役割を持っているということです。色々なNGOあるいは団体、そして国、中央政府当局と色々な形でもって協力が望まれるわけです。

ヴァル・ドマルヌ県議会、そしてまたこの地域の色々な自治体が共同して、この60周年を迎えた広島に被爆の地に代表団を派遣することを決定しました。この代表団には当然、色々な政党の人たちが含まれております。さらに30名ほどの若い人たち、彼らも色々な団体に属するもので、若者の国際的な出合いが3回目として今年開かれるわけですが、そういった場に参加をし、そしてこの被爆の地、広島における60周年の色々なイベントにも参加します。そして、この若者たちは、色々な人種、主義、貧困、飢饉といったことに団結の意思を高めるということで、行動している人たちです。

県の色々な組織が、軍縮だけでなく、この軍縮に関連した色々な活動に参加することを望んでおります。軍縮というのは、何も核だけではなく、貧困、あるいは排外主義といったもの、色々な不公平な、あるいは不公正な問題にも関連しているわけです。また、核の問題にこの広島で直接触れることは、いかに核が、そして軍事問題が、この平和の構築のために重要であるかということを経験することができると思います。

このように、広島に来るとということによって、自分たちの貧困のための闘いが、紛争が続く限り、十分な効果を生むことができない。そして、平和というものは、不平等が存続する限り、絶対解決できないということに至るでしょう。

我々は、色々な協力を奨励し、そして長い年月にわたって内戦を経験したベトナム、アパルトヘイトを経験した南アフリカ、内戦を長年経験したエルサルバドル、また核保有国である国によ

って占領されているパレスチナ、この四つの国をパートナーとして、我々は平和のための闘いを進めるということです。

そして、イスラエルはアメリカから一方的に支援を受けて、イスラエル地域だけでなく、世界全体の脅威となって存在しているわけです。それゆえ、正しいそして継続する平和の実現のために闘っているのが我々です。

さらに、ニジェールというのはアフリカでも最も貧困の国です。闘いのために色々なことをやっても、ニジェールはなかなか貧困から脱却することができない。自然が非常に厳しく、危機あるいはバッタの被害も非常に深刻なわけです。

地球を一瞬のもとに灰に帰すことができた、この技術をもった人類が、同じような技術をなぜ貧困と闘うために実施できないのか。絶対そのような貧困と闘う、貧困を解決するための技術は、存在するはずなのです。子どもたちを守る、子どもたちに支援の手を差し伸べることが絶対に必要です。

先ほど申し上げた五つの国、それぞれの国と協力をし、そして自分たちの考え方、自分たちのアプローチを進めることによって、この世界が持っている核というものを撲滅させる。そして、それによって得た新しい資金を住民の福祉のために活用し、そしてお互いの経験、友情を交わしていくわけです。

私ども自治体においても、そして我が国の県においても、同じような活動が見られるわけであり、また、多くのNGOが同じ方向に向かって努力をしている。地域の政府、そしてNGOは、重要な役割をそして重要な責任を住民に対し果たすべきであり、そして、この世界から全面的に核をなくすべきです。

最後に、ベルトルト・ブレヒトの「平和の嘆き」という詩を引用します。「雷が鳴り、そして風が吹く。風は雲を持って来る。しかし、戦争は雲がもたらすものではない。風がもたらすものではない。戦争は人間がもたらすものであり、そして春の酩酊の中で人は息を吐く。平和は、草のようになかなか緑にならない。木に花を咲かせるのは、人間である」。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

ヴァル・ドマルヌ県議会議員のシャンタル・ボービックさんに感謝申し上げます。それでは、欧州議会のギセラ・カレンバッハ議員、お願いいたします。

欧州議会議員、ライプチヒ市代表 ギセラ・カレンバッハ（ドイツ）：

議長、ありがとうございます。秋葉市長、ご出席・ご参会の皆様、NPT再検討会議の失敗は、

広島、長崎のそれぞれの方にとって大きなショックでしょう。こうした人々は、いまだに60年前の恐ろしい出来事から苦しみを味わっていらっしやるわけです。多くの人々が、まだ罪の意識について十分に理解していないということかもしれません。だからこそ、我々の発言は以前にも増して重要なのです。ですから、本日、欧州議会議員としての声明書について、お話をしたいと思えます。

部屋の後ろのテーブルにコピーを置いていますが、我々欧州議会は、核軍縮の声明を出し、そしてEUに対して全ての手段を尽くして、核兵器が決して配備されないように努力することを要請しています。このような声明書を出すことによって、私どもの都市の市長が平和市長会議に参画することを望んでいます。

私の出身地ライプチヒでも、市長が平和市長会議に参画しました。ライプチヒ市の市議会もこれに賛同しております。ライプチヒとティーフィンゼー市長から皆様にもごあいさつがございませう。昨日の夜、市長のごあいさつを秋葉市長にお渡ししましたが、東ドイツの平和運動がかつて展開され、そして暴力と対立の結果として、我々が、生涯の重要な貴重な資源を教育ではなく軍備にあるいは医療に費やさないようにしたいと考えています。ただ、署名活動だけでは不十分です。平和市長会議の望むところは、署名活動以上のものが必要です。

そして、私どもの行っている活動から市民を説得し、核兵器の世界全体の禁止に対しての動きを広げることが必要です。そして、平和と軍縮こそが、私たちが子どもたちに、そしてその孫たちに与えられる最大の遺産となるようにしたいと考えています。そして、その中で私たちは、様々な努力が必要であると、ドイツの経験からも言えます。

この会議を通して、皆さんの使っていらっしやる、それぞれの都市におけるこの目標達成の手段について耳を傾けています。どうすれば昨日説明のあった1年間のキャンペーン活動が、市民社会から100%支持されるようにできるか考えていきたいと思えます。

NPT再検討会議におきましては、根本的な問題に関して、EUは非常にはっきりした考え方を持っています。これは大きな一歩です。欧州議会にとって、その議員の一人として、私はEUが核軍縮に対して努力をするだけでなく、さらなる核技術の拡散を妨げることが重要だと考えています。

我々欧州にいる者にとって、欧州がこれからさらなる核兵器拡散を止めるためにどうすればいいか考えていかなければいけない。これが欧州の安全保障の枠組み、あるいはNATO、それ以外の枠組みの中で必要です。欧州議会緑の党の一員として、私は多国間の取り組み、外交をまず優先することが、二国間の合意そして軍事的な介入よりも必要と考えます。

NPTにおいては、モニタリングの義務が遵守されなければなりません。包括的な核兵器実験

禁止条約の3本柱も、残りの国が速やかに批准しなければなりません。そして、それが発効されなければなりません。核保有国も自らの義務を真剣に考えることが必要です。核軍縮がNPT第6条でもいわれているわけですから。

ご出席の皆様、欧州議会議員として、私は日本の方々に被爆60周年をもって、この悲劇がもう一度繰り返されないことを、皆さんと一緒に唱えていることを申し上げたいと思います。秋葉市長がNPT再検討会議に出された書面の内容を支持しますし、また、私たちは中堅国家構想やあるいは昨日の猪口教授の基調講演でも言われたことを支持します。新しい交渉の場が必要です。核兵器禁止のための新たな交渉の場が必要です。ありがとうございました。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

ギセラ・カレンバッハ欧州議会議員、どうもありがとうございました。それではアレン・オードゥベール、フランスのヴィトリー・シュールセヌ市長にご発表いただきます。そのあとで、エレン・ウッズワース、バンクーバー市議会議員をお願いします。

ヴィトリー・シュールセヌ市長 アレン・オードゥベール（フランス）：

グローバル化が世界的に進行する中、平和と地球環境問題の解決は同じ闘いであるという認識が広まっています。今回私の市の多くのNGOも、「2020ビジョン」キャンペーンに参加していることを、大きな満足を持ってご報告いたします。

実際、私の市のイニシアティブのおかげで、様々な行事があり、様々なNGOも独自の懸念、独自のテーマを表現しております。そして、それぞれの平和のための意思、そして軍縮への様々な願いを表現しています。

実際、25名のヴィトリー・シュールセヌの住民が、現在、広島に来ています。多分後で発言するピース・ムーブメントというグループと一緒に来た人たちもいますし、他の人たちは私たちの市の青年課が企画した滞在として来ております。直接的な平和運動であろうと、人道主義的なものでであろうと、援助のため、共に発展するため、あるいは持続可能な発見、持続可能な開発、あるいは環境保護であろうと、地元の団体、NPOの活動家は、ますます人類や地球が苦しんでいる、悪は支配や力関係に密接に結びついた行動形態によるものだと自覚を強めています。

毎年、8,750億ドルにも上る世界の軍事費は、国連が飢饉、識字教育、医療、飲料水、地球環境の保護対策に当てる予算の3倍であるという事実は、彼らを驚かせています。こうしたことは「2020ビジョン」を中心に、人々を立ち上がらせるに当たり、広範な活動分野を提供してくれています。

加えて、ますます人口が大都市に集中し、巨大都市が形成される中、国連と並んで、また国連の中で、自治体が国際的な役割を果たすべきだとの願いが大きくなっています。したがって、今後、次のような三つの方向で努力していく必要があると思います。

まず、もちろんピース・ムーブメントのような平和主義的な運動や私たちの都市それぞれにおける市民の参加を促すのに適切な団体との交流を深めることです。

二つめに、多くのNGOの活動家が、世界社会フォーラムの他のイニシアティブの中で、他のNGOと交流していることをよりよく考慮することが必要です。次回の2006年の世界社会フォーラムは、アメリカではカラカス、アジアではカラチ、アフリカではバマコ、そして欧州社会フォーラムはアテネで開催されます。

このように各地に分散された会場で行われるわけですが、この世界社会フォーラムの多様性を尊重しながら、平和市長会議も、さまざまなテーマにおいて違う考え方を持っていますけれども、しかしそれでも「2020ビジョン」の目標を、このもう一つの世界を構築しようという試みの一環の中に組み込むことを提案してみてもはどうでしょうか。

3番目に、私たちの都市の国際的なつながりをもとに、平和市長会議の参加都市を増やす努力をすべきではないでしょうか。ヴィトリー・シュールセーヌと姉妹提携している二つの都市は、私たちの平和のための取り組みに積極的に参加してくれており、2006年には平和市長会議に参加できるように、それぞれ議会に諮ることになっています。

フランスでは、これは既に一つの進歩ですが、60もの加盟があります。しかし、それは主に中規模や小規模の都市です。私たちは、うれしいことにパリ市が広島市の協力のもと、原爆展を企画することに貢献しました。しかし、さらに推し進める必要があります。例えばもっと大きな都市、リールやリヨン、マルセイユなどのフランスの他の大都市を巻き込んでいかなければなりません。

最後に、同じ精神のもとで平和市長会議は国際地方自治体連合（IULA）と、それから世界姉妹都市連合が合併してできた都市連合とさらに深い関係を築いていくべきではないでしょうか。

以上が、私から皆様への提案です。核廃絶という緊急課題に対する市民の意識を高めるため、こうした新たな、あるいはさらなる努力が必要であると思われまます。ご清聴ありがとうございました。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

アレン・オードゥベール、ヴィトリー・シュールセーヌ市長、どうもありがとうございました。それでは、エレン・ウッズワース、バンクーバー市議会議員、お願いいたします。ウッズワース

さんのあとは、パルメラ市のアナ・ビセンテさんをお願いしたいと思います。

バンクーバー市議会議員 アレン・ウッズワース (カナダ) :

ありがとうございます。今回この会議に参加できまして、特に被爆60周年の年に来られましたことをうれしく思います。60年前、広島市、長崎市は二つの原爆によって破壊され、何十万人の方が亡くなりました。これは人道に対する罪です。犠牲者、そして被爆者の皆様には、日本における平和運動の礎を作られたと同時に、世界の平和運動を促進されたということに敬意を表したいと思います。

昨年11月に、キヌコ・ラスキーさんという被爆者であり、平和活動家であった方が亡くなりました。やはり我々は、両都市の市長の貢献にここで敬意を表さなければいけません。両市の過去からの活動により、平和市長会議が生まれました。バンクーバーとしても、この平和市長会議、そしてピース・メッセンジャー都市国際協会の一員であることを誇りに思っております。

バンクーバー市は、世界の各地に、侵略に対して「ノー」と言い、また、イラクにおいても、有志連合に加盟することをカナダは拒否しました。我々は、核を廃絶しなければいけません。そして、軍国主義、戦争に終止符を打たなければいけません。軍事費が増大することによって、地方自治体の教育、住宅、基本的なインフラ整備の予算が奪われています。

2005年の3月31日にバンクーバー市の市議会は、全会一致のもとワールド・ピース・フォーラムの開催を決めました。来年の6月22日から28日に、バンクーバーでワールド・アーバン・フォーラムの開催直後に開催の予定です。また、バンクーバー市は15万ドルを寄附する予定です。これはバンクーバーの教育委員会、そしてバンクーバー公共図書館のサポートも得ております。

ワールド・ピース・フォーラムを開催しようということは、バンクーバーにおいて2003年の3月に決定されました。これは戦時中の非人道的な行動について考える会議であり、アジアにおいて強制労働や性奴隷、あるいは生物兵器、化学兵器などの犠牲者となった人たち、また日系カナダ人の人たちが被害者となったことなども含めて、またジェノサイドなどについて考える会議でした。

いちばん最近では、「レジデンシャル・スクール」での虐待等もあったわけですが、その頃にイラクの爆撃がありました。そして、その会議の参加者の間で、やはり侵略戦争に反対しなければいけないということに大きな声が上がったわけです。我々が将来バランスを取って前に進んでいくためには、様々な世界各地での、中東からアジア、アメリカ、そしてアフリカに及ぶ平和に対する脅威に対応していかなければいけません。そして、例えば朝鮮半島においても、非核化を進

めなければいけません。

そういった多面的な内容を持った会議であったわけですが、ワールド・ピース・フォーラムには1940年代、1950年代からのそういったものを経験した高齢者の人たちも参加したとともに、世界社会フォーラムの場でも参加しているいろいろ聞きました。やはりこの時期にこそ、北米、バンクーバーでこのような会議を持つことの意義があるのではないかということに同意が得られ、最終的に開催が決まったわけです。

前の世界の平和会議、そしてまたワールド・ピース・フォーラムなどのこれまでの経緯を受けて来年も開催されるわけですが、支持は非常に高まっています。その時期にバンクーバーで他の会議も開催したいという申し出が数多く出てきております。ワールド・アーバン・フォーラム、ワールド・ピース・フォーラムが続けて開催される時期を同じくして、色々な会議が開かれる予定です。カナダのアドバイザー・ボディ、またワーキング・グループ、これは青少年のワーキング・グループ、婦人のワーキング・グループ、そして反カースト等のワーキング・グループがそれぞれのカウンターパートと今作業を進めております。

皆さんの都市の中で、青少年のワーキング・グループのようなものが積極的に展開されているとするならば、ぜひとも、やはりそういったところとも連携していきたいと思っておりますので、ご連絡いただきたいと思います。

今回のこの会議では、お互いネットワークすることを進めたい。そして、今の運動組織を強化していきたい。世界中のベスト・プラクティスから学んでいきたいと思っております。そして、そこにはこの会議から、後世に残す遺産が得られればと期待しております。ケース・スタディ、そしてまたベスト・プラクティスというのは、我々は「アクティブ・プラクティス」と呼び換えています。「ベスト・プラクティス」と言った場合には、知的なモデルだけに終わる可能性がありますので、アクティブなものということで「アクティブ・プラクティス」という形で最近では呼ぶようになっておりますが、そういったところから学んでいきたい。これは、自治体でもなく、コミュニティだけでもなく、やはりシビック・モデルとして我々はパートナーシップを組んでいきたいということです。また、男女の分け隔てのない形で、先にどう一緒に進んでいくことができるのかということで、何か最良事例のようなものがあれば、ぜひとも教えていただきたいと思います。

ケース・スタディに関しては、ベルギーの半数以上の都市が、どうやって平和市長会議のメンバーになったのかということも言われましたが、これだけ高いレベルの参加を促してきた原動力は何なのか、お互いから学ぶことができるのではないかと思います。そういったことをベースにして、ワールド・ピース・フォーラムでさらに教訓を得ていきたい。経験というのは、プラスの

ものもあれば、マイナスのものもあると思いますが、学び合うことによって、前に進むことができると思います。

そこで、世界中から個人・組織の事例を中央のウェブサイト（www.worldpeaceforum.ca）をごらんいただきたいと思いますが、そこで情報を集める。そして、2006年当初には、こうした経験のいくつかをまとめたうえで、地方自治体、地域社会がどのように協調することができるかをまとめたうえで、ウェブ上で会議前に掲載したいと思います。そして他のメディアにも配付する予定です。

そして、第3段階としましては、ワールド・ピース・フォーラムの参加者は、ディスカッション・ペーパーに対して反応をいただきたい。フォーラム開始の1～2週間位前に配付されますので、それを基に皆さんのフィードバックをいただきたいということです。

そして、市民社会グループにも参集していただきます。そして、そのセッションが終わった段階で、ウェブ上にその結果を掲載することになります。ですから、こうした形で我々は平和市長会議からも、色々なヒントを得ながらやっておりますが、来年の6月、バンクーバーでお目にかかるのを楽しみにしております。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

エレン・ウッズワースさん、バンクーバー市議、ありがとうございます。アナ・ビセンテさんをお迎えします。パルメラ市長です。ビセンテさんのあとでヘインリッヒ・ニーマンさんをお招きします。

パルメラ市長 アナ・ビセンテ（ポルトガル）：

最初に申し上げたいのは、この会議に参加でき、この瞬間を広島で皆様と共有できることを光栄に思っていると申し上げたいと思います。ご出席の皆様、友人の皆様、アテネの哲学者ソクラテスが言いました。彼はアテネの市民ではなく、世界の市民だと。我々は、殉教という都市広島の市民の一人、そして世界の市長の一人だと考えています。そして、広島その他の市に対して、我々は責任を持っています。

建物というのは、下から上へ造ります。我々市長の力は、市民という我々が選ばれたその力から上へ来るものです。核兵器廃絶への取り組みは、我々がやりたいと思っている連帯感の、いかにそれがグローバル化できるかにかかってきます。我々は、鎖の中の最後のローカルな部分に力を持っている。したがって、市民の願いをいちばん近いところで感じています。そして、市民に対して直接応えていかなければいけないという使命もあります。ですから、ポルトガルではたく

さんの市が核兵器廃絶署名をしています。異なった市長は、イデオロギーも政治的な考え方も違
いながら、この請願書に署名しました。

間もなく10月に地方選挙がありますので、今回、ここに参加している市長が私一人だけだ
というのは、そのような背景があるわけですが、友人の皆様、広島の爆発は、男女、そしてこの考
え方や哲学に関わりなく、無実の子どもや老人を地獄の炎に巻き込みました。核兵器は全ての人、
全てのものを破壊します。いまや地球やその生命全てを破壊できる、水爆の破壊力は広島・長崎
の爆弾よりも何千倍も強力だと言われています。私たちや私たちの子どもや都市は、皆、核兵器
を支持しようとする人々を敵だと考えます。それが、私たちが直面しなければいけないところ
です。そして、世論でもそれを考えていくことが必要です。

核兵器廃絶のために、全てが今すぐ参画し、協力することが必要です。世界の市長として、私
たちはここに来て、広島、長崎への罪に対しての嫌悪感を発言することが必要です。しかし、こ
れは闘いです。残念ながら、世界の指導者で自分は力があると思う国々が戦略を曲げないのです。
核兵器を使うのだと言うのです。こうした国々の戦略、そして国際的な努力や条約、こうしたも
のを無視し、そしてその結果さらに開発や計画を続けるということで、世界全体に不安定要素を
もたらし、また、他の国々も同じようなことをしようとしています。何百万人の人々を飢餓から
救えるようなお金を、軍事費に払っているのです。

そして、好戦的な国々のとらわれになってはいけません。偶然、例えばホロコーストが起こる
こともあり得るのです。今ある核兵器だけでも、地球上の全ての生命が破壊されるのです。一体
どのような病気の心を持って、核兵器能力をさらに高めようとするのでしょうか。核兵器とい
うのは、世界に不安定要素をもたらし、持続可能な開発をできないようにします。今すぐ国際的な
秩序と安定のために、それをなくさなければなりません。

殉教の町である広島に、我々は今集っています。そして、ここでは一瞬のうちに何万人の人々
が殺されたわけです。そうすると、我々はその闘いをますます現実味を帯びたものとして考える
ようになります。

そして、戦争というのは、一般に人々によって恐怖ですが、核兵器というのはさらに怖いもの
です。政治も軍隊も右派も、あるいは左派も、宗教に関わる人も関わらない人も、労働者もイン
テリも、町の人も地方の人も、皆協力することが必要です。

私の市パルメラは小さな市ですが、丘の上にお城があり、そこから空を見上げ、川を見、そし
て周りのリスボンを含め、美しい橋や街を見ることができます。母なる大地が作ってくれた自然
の賜物を、その城から見るすることができます。人々の努力の成果というものが、そこから見られる
のです。

核兵器のキノコ雲が空に上がり、そしてこれを全て壊してしまう。何世紀もの歴史のあるものを燃やしてしまい、世代を越えて将来の子どもに苦しみをもたらすのは、想像できません。もう広島、長崎は決して繰り返してはなりません。核兵器のない世界が必要です。

そして、こうしたことがワシントンでも、モスクワでも、北京でも、テルアビブでも、パルメラでも、どこでも起こらないようにしなければなりません。良い核兵器、より良い核兵器などというものは決してありません。全てが恐怖や痛みをもたらします。我々の市では、我々のエネルギーを費やして、平和が全ての人々に対する闘いであることを伝えていきます。広島や長崎について話す時も、イラクやティモールについて話す時も、エネルギーが必要です。お互いの人々が知り合うことが必要であり、違いに敬意を払うことが必要です。寛容性を持ち、友情と協力の気持ちを世界中に生み出すことが必要です。ですから、我々地方自治体は、国際的な協力をしながら、世界の平和をもたらす闘いに取り組まなければならないのです。

その中で、我々の協力をグローバル化することが必要です。そして、お互いにつながりを持ち合うことが必要です。昨年、新たにできたパリの組織がありますが、そこは全ての市町村、世界中が集まる組織です。この組織は都市・自治体連合（CGLU）と呼ばれている地方自治体の統一組織で、国連とも関連を持っています。政治的な権力を持つ人々は、例えば何百万の人々が反戦・平和を唱えてデモをすれば、やはり耳を傾けなければなりません。また、地方自治体は市民の声をよりよく聞くことができますし、市民は平和なくして発展がないこともよく分かっています。

最後に申し上げたいのは、広島というのは苦しみの例であると同時に、希望のお手本でもあるということです。美しい町を復興された地方自治体、そして市民の方々に、心から「おめでとうございます」と申し上げたいと思います。平和よ永遠なれ。ありがとうございました。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

アナ・ビセンテ、パルメラ市長、ありがとうございました。それでは、ベルリンの12区の一つ、マルツァーン・ヘレルスドルフの代表でいらっしゃいますヘインリッヒ・ニーマンさんをお招きしたいと思います。

ニーマンさんの次には、ピース・ムーブメントのピエール・ビラードさんをお招きします。

マルツァーン・ヘレルスドルフ区都市開発担当議員・副区長 ヘインリッヒ・ニーマン（ドイツ）：

ご出席の皆様、マルツァーン・ヘレルスドルフはベルリンの12地区の一つですが、今回、初めて平和市長会議総会に参加させていただいております。私の最初の仕事は、皆様の経験や皆様

のアイデアに耳を傾けることです。今日、欧州議会の方からの発言もありましたし、ベルリン市議会議長の話もありましたが、ベルリンという大きな市ですので、その中のそれぞれの区が、具体的に責任を担うことも重要になっております。これは通常の市の行政という領域だけではなく、より地球的な問題についての取り組みもそれぞれの地区で行っております。

そこで、我々も平和市長会議の一員となったわけです。私は、ベルリンにあります12の地区の一つを代表しております。最も若いのです。30年前にできたばかりです。この背景としては、大規模な住宅団地ができたからです。10万軒分のアパートができて、現在24万人がマルツァーン・ヘレルスドルフに住んでおります。

私どもの区のもう一つの特徴としては、ベルリンの中でも1945年、ソ連軍が最初にベルリンの中に入ってきて、ファシスト・ヒトラーを打倒した場所なのです。そして、2年前、私どもの区に日本の禅の庭園が造られました。これは「つながる水の庭」と呼ばれております。日本の造園家と枡野俊明という僧侶の方が造られました。平和と人間性、我々の地球の豊かさの象徴です。これは「世界の庭園プロジェクト」という私どもの町のプロジェクトの一環です。

そして、若い人々、歴史的なルーツや責任、そして文化的な目を持って、世界に対して私たちのやるべきことに取り組まなければいけないことを示すわけです。老若男女全てが、平和維持に努力をしなければいけないと考えております。

まず、若い人々、子どもたち、その孫たちに啓発をする、情報を伝える、それを我々の重要な役目と考えています。それは必要というだけではなく、以前にも増して、これはもっとうまく進んでいます。若い人々は、今、危険な状態があることを理解しており、そして自分たちにも色々なアイデアがあると言って話をしてくれます。

一つ例を挙げますと、16歳のギルステン・ボーリンガーが、ニューヨークで平和活動に参加しました。この5月、国連の再検討会議の時です。この16歳の女の子は、国際法を守る壁のキャンペーンにも参加しました。

皆さん、昨日、原爆ドームの前でそれをご覧になったと思います。私は彼女のサインの入ったものはどこにあるのか、探すのをすぐにあきらめてしまいました。何千もの小さな木のブロックの中に、何千ものたくさんのサインがそれぞれ載っているのです。なんと強力なシンボルといえることでしょう。

他の若い人々は、1990年代には、NATOが旧ユーゴスラビアを爆撃したことで、大きな石や花を使って公園に「PEACE」というサインを造ったことがあります。そして、この公園は現在、「ジェレナサンティック平和公園」と呼ばれています。ミーティングやコンサートその他のイベントが、平和と戦争に関して、そして色々なテーマで開かれています。

私個人のことを少しお話ししたいと思いますが、医学部の学生であったことがあります。ベルリン・フンボルト大学に在籍していた時、フリッツ・ギーツゼルト先生の講演を聞きました。医師であり、放射線の専門家として、この方は1950年代に医師団の一人として、広島原爆の影響についての調査に広島に行ったということです。その時、先生の講義の中で、彼はこう言いました。「核兵器に関しては、医師は中立であってはならない」と言ったわけです。このことは、私の生涯忘れられない言葉となりました。

その後、核戦争防止国際医師会議の一員として、私は1988年、ネバダの実験場の近くで科学的な会議に参加しましたが、そこで驚いたのは、アメリカでは核実験が隠れて何度も行われていたということでした。国際的なルールに反しているのです。そして、1990年にセミパラチンスク、ソ連の核実験場の近くですが、そこで初めて核実験の影響がどんなものであるか、人に対して、そして自然に対しての影響を見ました。

そして、1989年、16年前ですが、私は広島、長崎におきまして、第9回世界核戦争防止国際医師会議の会合に参加しました。二つの超大国、冷戦時代の最後の会議ではありましたが、その当時でも、核兵器廃絶についての話が出ていました。そして、核兵器廃絶に関しては、冷戦時代は希望であり、そして当然の要求でした。

しかしながら、現在、核軍縮は必要なほど進捗を見ておりません。私は、もう12年以上議員として若い区の都市開発に携わってまいりましたが、昨日、平和記念資料館で致命的な文書を読みました。広島においては、75年もの間、成長がないということでした。これは人の一生に相当する年齢です。

私どもの区は26年の歴史しかありません。マルツァーン・ヘルスドルフを代表して申し上げたいのですが、私どもは、平和市長会議の運動を、私どもなりに展開していきたいと思っています。2020年になりますと、私どもの町は41歳の誕生日を迎えます。そのときは、大人になった、そして花開く町になりたいと思っています。そこでは核兵器がなく、平和な地域社会が生まれ、そして世界中それぞれが、独自の町として花開いていることだろうと思います。ありがとうございました。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

ヘインリッヒ・ニーマンさん、どうもありがとうございました。それでは、次にピエール・ビラードさん、ピース・ムーブメントの方にご発表いただきます。そのあとはヤニック・ハケ、国際法の壁キャンペーンの方をお願いいたします。

ピース・ムーブメント共同議長 ピエール・ビラード（フランス）：

議長、ご列席の皆さん、そして世界の市長の方々、そしてNGOを代表されるの方々、NGOを今回この会議に招へいくださったこと、そして、フランスのNGOの中でも最も平和的な主張の強いピース・ムーブメントの代表として、まず心から御礼を申し上げたいと思います。それに、広島に今原子爆弾に反対する原水協の会合が開かれているわけですが、それに出席することもできました。

この核兵器を廃絶するという目的を達成するためには、暴力、戦争、核兵器といったものに反対しなくてはならない。ところが、実際には拡散の傾向がある。そして拡散がますます、平和の文化を陥れているということです。

我々は、この地球において色々な夢を持つということですが、しかし、必ずしも夢が達成しない。5月のNPTの再検討会議においても、核兵器をなくすという結果にはならなかったわけです。結果が得られることを期待したわけですが、しかし、核保有国は自分たちの特権に固執して、その本来の目的を達成することができませんでした。

今日、世界の各地で見られる色々な出来事は、非常に悪い状況であるということです。サダム・フセインの戦争に勝ったアメリカ、しかしテロリズムに対してアメリカは戦争に勝ったということとは言えない。どのようにしてテロリズムをはじめ色々な形の暴力に対抗することができるのか。そのためには、まず貧困あるいは未開発、民主主義の不足、権利あるいは尊重といったものが存在しないといけない。そうした根本の問題に我々が努力を傾注しなくて、どのようにしてテロへの戦いを効果的なものとすることができるでしょうか。

2001年以降、アメリカが色々行っている破壊といったことに、我々は非常に懸念を感じるものです。国が、あるいは民族が、イラクの戦争に反対するという。そして、反対することによって、アメリカが国際社会において孤立をしたということもあるわけです。そして、国連の安全保障理事会の間でも意見の対立が見られる。核保有国の間でも意見は一致しない。アメリカから、それに対してどのような責任をまっとうするような行為あるいは対応が取られたか。アメリカがどのような形でもって、軍縮を行うか。この軍縮が実現するのをアメリカのやり方で待っていれば、22世紀にまでかかってしまうでしょう。

それぞれの核保有国が、新しい軍縮のためのプロセスを開始しなくてはならない。現在、この核兵器に反対しているというのは、世界の中でも大多数であるわけです。そして、一部の小さな国々も、核兵器を持っているのではないかとということで、いろいろ疑いをかけられているわけです。

我々は、核兵器を持っていることよりも、核兵器を放棄したという国に、もっとポイントを置

くべきです。自治体は市民を動員する。そして、その市民を置き換えるわけにはいかない。市民が色々な動きを展開すること、そしてこの市民の動きは、世界が歩む道を変えることができるわけです。市民が、自分たちの意識が何であるか、そして自分たちの責任が何であるかを認識するということです。

NGO、自治体、それぞれ責任を全うすべきです。私たちのネットワーク、私たちの権限がある、そういった自治体として、NGOとして持っている力を他の組織が取って代わることはできないわけです。一緒に同じ目的に向かって努力を傾注する、その目的が核兵器の廃絶です。この廃絶を実現するためには、軍事力に代わる力があるはずです。まさしく、平和の文化こそが軍事的な問題に取って代わる解決の方法なのです。

ピース・ムーブメントということで、私たちがこのような運動を始めているということ、そのためには重要なパートナーシップが必要です。核不拡散条約については、多くの都市に対して、広島市長と意見を分かち合おう、市長に同調しようというような動きを展開しました。

そして、多くの市町村が平和市長会議に同調するようにというネットワークを作ったわけです。そして、フランスの平和市長会議ネットワークというものを作り、この広島の考え方に同調する、そして同じ考えを分かち合おうということを行っているわけです。

そのようなことが実際に成果を生んで、広島・長崎の被爆の日には、私たちは色々な催しを行っております。昨日、秋葉市長も我々の若者の代表に会っておられます。被爆者、そして核兵器というものが、歴史の単なる1ページとして残されるだけであって、私たちが子どもに、孫に、ある日、人間はこのような核を完全に放棄することに成功したのだということが言えるようにしたい。ぜひ、このように核を廃絶する勇気を私たちは持つべきだと考えます。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

ビラードさん、ありがとうございます。次に、国際法の壁キャンペーン、ヤニック・ハケさん、お願いします。その後は、英国非核自治体協会、ジョージ・レーガンさんです。

国際法の壁キャンペーン ヤニック・ハケ（ドイツ）：

議長、ありがとうございます。市長の皆様、ご出席の皆様、本日この機会をいただき、国際法の壁キャンペーンを代表して皆様の前でお話しできますことを大変光栄に思っております。私の世代の代表としてここに来ており、私どもに大きな希望をくださったということをもまず申し上げます。

NPT再検討会議において、コフィ・アナン事務総長が言いました。市民社会に大きな影響が

ある努力というのは、対人地雷禁止条約や京都議定書につながった人々の努力だということです。私は平和市長会議に御礼申し上げます。皆様がお手本となって、政治的な活動を市民社会で行うイニシアティブの取り方を教えてくださいました。私は、皆様と一緒に核兵器廃絶の努力をしたいと思っています。

また、皆様は政治的な活動が市民社会の中から生まれ、効果があることを示してくださいました。言い換えれば、完全な核の廃絶は、後戻りすることなく進められなければならない。そして、市民社会における意識を強化し、そして同じように重要な、核兵器以外の他の問題についても人々が認識を高め、そして世界中で政治的な力になりたいと考えております。

私たちは、国際法のキャンペーンに携わる者、そして世界中の若い人々と連絡を取って、自分たちの立場をはっきりとさせています。我々は無言の証人になりたくはありません。世界に環境的・経済的・人道的に悪い影響を及ぼすことが分かっているながら、政治家たちは、自分たちの国家の富や国家の安全保障、国家の力を強化するための意思決定をしてしまう。それを許すことはできません。政治家たちは、自分たちが地球において、国家の幸福の安全保障のために武力を使うことは許されるのだと、地球上どこでもそれは当然だと思っている。これを許してはなりません。

我々は、政治家たちが国家の利害にかなって、核兵器を使うのは合法だと思うことを許してはなりません。核兵器は60億人の地球上の全ての人にとって脅威です。だからこそ、この脅威について、これを最終的になくすために立ち上がらなければならないのです。核兵器は、何十億もの人々の文化や生命を脅かしますし、軍事施設ではなく、市民を対象にするものです。そして、さらにこれを維持・開発するような人々は、ミレニアム・ゴール達成のために使えるお金やリソースを、他に使ってしまうのです。国の正義や人間の住んでいる状況をよりよいものにするためのお金を、他で使い切ってしまうのです。そして、人々の平和なる共存をできないようにしてしまうのです。

私たちは、重要な人間の歴史というものを作っていかなければなりません。軍事力が非合法だということは、国連憲章の中でもいわれています。これをはっきりとさせなければなりません。国家が、兵器を使って攻撃を受けることを脅威と考えるのであれば、当然それをなくさなければいけないのです。そして、暴力の放棄、そして軍事的な力を使うことを、しないようにしなければなりません。これは核兵器も含めます。

そして、脅威を避けなければならない。そのためには、既存の平和を守っていくということに対する大きな脅威が兵器にあることを、人々に理解させなければいけない。核の暴力の悪循環を絶つためには、こうした兵器の使用を全くやめさせることを世界的なコンセンサスで達成するこ

とが必要です。こうした武器が非合法である、そして既存の武器の完全撤廃が必要です。

このような目標達成は難しく、随分先のことだとも思いますが、私たち一人一人が努力しなければいけません。何百万の我々が夢を見ているだけでは不十分です。夢を現実にするためには、行動が必要です。だからこそ世界中署名を集めた人々とともに、私たちは政治家、意志決定者に対して次のようなことを要請します。

無条件で約束したことを守り、そして戦争の不幸から人類を救ってほしい。そして、軍力は、国連憲章でいわれているように非合法的なわけです。これはもう20年前にいられています。これを例外なく認めなければなりません。

全ての地球上の人々のために、国際的な法を遵守し、そして後戻りできない形で、全ての核兵器を廃絶すべきです。我々は、これが実行されるまで、ただ待っているだけでは不十分です。政治家たちの動きを待っているだけでは不十分です。そうではなく、私たちは積極的にこの道を進んで、世界全体のために努力をしていくことが必要です。

そして、皆様一人一人の政治家の方にも訴えかけて、個人一人一人として、私たちとこの道を歩んでもらいたいとお願いしたいと思います。

そして、平和市長会議の皆さんにも、秋葉市長、伊藤市長、リビングストーン市長、シュマルスティーク市長のように、国際法の壁キャンペーンにも参加し、皆さんのそれぞれの都市において、このキャンペーンを展開していただきたいと思います。ありがとうございました。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

原爆ドームの所に、国際法の壁を作っておりますので、ぜひご覧いただきたいと思います。ヤニック・ハケさん、ありがとうございました。

皆さんにお知らせしますが、実は広島で、昨日は300人の集会が若者によって持たれました。どうすれば平和運動に若者たちを巻き込んでいくことができるのかというテーマにも、関心が高いかと思うので、また後ほどこのテーマについても話ができればと思っております。

それでは、英国非核自治体協会のジョージ・レーガンさんにまずお伺いして、そのあとでアスミン・マリカーさん、スリランカのカンデーの方にお伺いします。

英国非核自治体協会会長 ジョージ・レーガン（イギリス）：

市長、各位、私は英国非核自治体協会を代表してまいりました。私たちの組織には、75の自治体が加盟しています。そして、現在さらにアイルランドとも連帯したいと考えているところです。

我々は、平和市長会議とも密接に連携しながら、各自治体に対して、その進捗と平和市長会議の偉大なる実績については、常に伝えております。今回参加ができて、通常の議員としてこの場に参加できることをうれしく思いますが、しかし、やはり広島に来てみて初めて、これほどの悲しみなのかということを感じました。そして、平和記念資料館に行き、説明に耳を傾けて、本当に恥ずかしく思いました。

各国の政治家、ブレア首相などが、ブッシュ大統領のただ後に着いていくのではなく、核兵器を使い続けることが、いかなる結果をもたらすのかについて、政治家は平和記念資料館に実際に来てみるべきではないかと思えます。

スピーチは書いておりません。この感動を伝えたいと思ひまして、ここに立って話をしております。世界の指導者たちが、核兵器を怖くないというのであれば、選挙民は怖いだらうと思ひます。平和市長会議の我々も、市民に呼びかけていくことが必要だと思ひます。そして、まともな市民であれば、核兵器を手にしたなど考える市民は一人もいません。まともな考え方をする人だけを、選出すべきだと思ひます。普通の人であれば耐えられないはずだからです。

英国は、トライデント（潜水艦発射弾道ミサイル・SLBM）を更新することを政府が決めたことに関して、我々市民として、絶対に反対していかなければいけません。しかし、この会議に来て、色々な人の話を聞きました。様々な幅広い活動があるのだということを知りました。すなわち、弾みを失わないように、勢いを失わないように、そして核廃絶に向けての圧力をかけ続けることができるようにする活動は、色々なものがあるのだということを知りました。

最終的には、やはり人を愛し、そして平和な生活をしたいという人たちを説得し、支持を集めていくことが必要です。まともな考え方をする人であれば、ちょっとでも人間性があれば、このような兵器を使うという考えを持つことはできないと思ひます。平和のためには、汗をかかなければいけません。大きな棒を振りかざして人を怖がらせることのほうが、はるかに容易でしょう。平和的な手段で人を説得するよりも、人を怖がらせて言うことを聞かせるほうが、はるかに容易だということを考えれば、これからまだ我々はやらなければいけないことがたくさんあると思ひます。機会をいただき、ありがとうございました。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

レーガンさん、ありがとうございました。英国非核自治体協会会長でいらっしゃいました。それでは、アスミン・マリカーさんです。スリランカ、カンデー市議会議員です。その後は、マリー・エレン・マクニッシュさんです。

カンデー市議会議員 アスミン・マリカー・アブダル・カリム（スリランカ）：

アラーの御名のもとに、皆様に祝福がありますように。まず、皆様に平和をお祈りしたうえで始めたいと思います。議長、スリランカでは、市長はやはり尊敬される対象ですので、そのような敬意を持って皆様にお話をしたいと思います。

私にとりましても、この機会を与えられたことを大変光栄に思います。皆様とともにここに立ち、広島被爆60周年の総会の場で話をさせていただく機会をいただき、本当にありがとうございます。しかし、これは、私は光栄な機会ですけれども、60年を振り返りますと心も痛みます。

まず自己紹介をします。私はムスリムです。スリランカという「インド洋の真珠」として知られる島からまいりました。大多数の人は仏教徒です。そして、私のまいりました市はカンデーという仏教寺院なども数多い聖地です。そして、ブッダの歯が祭られている所です。そして、ムスリムもヒンズーもキリスト教徒も、お互いに石を投げれば届くようなところに、それぞれの寺院を建てているということです。

私はムスリムです。私の名前自体がそれを示すでしょう。そこで、我々も色々な破壊を経験してきました。例えば、自爆テロを市内で起こすような人たちもいます。ですから、世界で起きていることを我々は恐れます。長い時間をかけて今回広島にまいりました。そして、皆さんとともに時間を過ごし、皆さんの考えを聞き、我々の考えを聞いていただくために来ました。平和市長会議の大義をさらに推し進めていくためです。

60年前、この生活している都市の上で、原爆が炸裂しました。そこで、それ以降、世界からこのような破壊がないようにしなければいけない。そのために何をすべきか、我々はこれまで討議をし、いろいろ努力をしてきました。私はまだ生まれておりませんでした。しかし、私は60年前の出来事を私の中に感じます。科学者たちは、核技術の栄光を今享受しております。そして、多くの核を保有する国にとって、栄光とされるのかも分かりません。しかし、そのような死をもたらすような爆弾の開発に従事している国や科学者を非難しなければいけません。広島は核兵器を実験するための場として、60年前に選ばれた場所です。生きている、生活が行われている都市の上で、アメリカは核実験をしたわけです。

我々は戦争を終わらせるために、核を使わなければいけなかったと教育されました。しかし、もし一つの手榴弾で、ある個人が殺されたとしても、一人でもそれは「殺人」と言われます。2001年9月11日、ニューヨークのツインタワーに、2機の燃料を満タンに積んだ飛行機が突っ込みました。そして、世界は大きなショックを受けました。無実のアメリカの国民の人たちが、日常の生活をただ日々送っていただけなのに、よりよい生活のために働いていただけなのに、そのテロの犠牲になりました。彼らに全く罪はなかったのです。何が起きたのでしょうか。

苦しんだのは市民でした。我々は政党政治を推し進めながら、それが宗教化してしまったのではないかと思います。我々は政党を支持していますが、しかし、政党というのは、彼らが力を持つと自分たちの考えるところだけを独善的に推し進め、いつも犠牲になるのは市民、民間人です。そうした中で、ツインタワーに飛行機が突っ込んだわけです。

なぜこういうことが起きたのでしょうか。これは、アナリストによると、あるメッセージであるといわれます。このためにアフガニスタンが爆撃された、ここでも国はメッセージを発した。そしてイラクにも爆撃をした。これは新世界秩序を作るための新しい、また別のメッセージであるといわれました。そして、マドリッドでもロンドンでも、テロによるメッセージがあったといわれます。

すなわち、自分たちの考え方を正当化するために、自らそのメッセージを伝えるために実行したということなのです。自らの体に爆弾を巻きつけて自爆する、あるいはトラックに爆弾を積んで突っ込む、こうしたことを我々が望んでいるわけではありません。平和の世界が欲しいわけです。

60年前から核兵器は使われていませんが、しかしメッセージとして国に爆撃が行われている。そして、まばたきをする一瞬の間に、国を破壊してしまうような、より迅速な正確な爆撃が可能になっています。広島爆撃、そしてそこから出てきたメッセージというのは、間違った形で受け取られてしまったのです。それを悪用しようとする個人がいるということです。

ここで憂うべきは、個人が自分たちの信じる場所を実現するために、広島で原爆が落とされたように、同じように自分たちの手でメッセージを伝えようとしてしまっているところなのです。ここで、我々はこうしたことに歯止めをかけなければいけないと、強く訴える必要があります。

手榴弾であっても、一つの爆弾であっても、悲劇を生むわけです。我々は、強いメッセージを伝えていかなければいけません。市長だけではだめです。このような死の産業に関わるような国々を、強く非難していかなければなりません。

日本は唯一の被爆国ですが、今日では多くの技術を与えられた国ともなっております。我国には、日本製のものが国中にあふれています。日本は一つの挑戦課題を投げかけられております。そして、その課題の中で、これまで非暴力で模範的な立場を取ってきたと思います。その日本に与えられた贈り物、先進的な技術を皆と共有していただきたいと思います。そして、核兵器などの開発に歯止めがかかるように、皆で力を合わせていければと期待しております。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

スリランカ、カンデー市のアスミンさんでした。どうもありがとうございました。

それでは、次にアメリカン・フレンズ・サービス・コミッティーのマリー・エレン・マクニッシュさんにお願ひしますが、その後で10～15分、コーヒブレークとさせていただきます。あと3名スピーカーがいらっしゃいます。ブレークの後に伺います。そして、2時半ではなく3時から開始しましたので、5時半まで伸ばしてよろしいと言われておりますので、ブレークを取りました後、3名の方からお話を伺うことにします。それでは、マクニッシュさん、どうぞ。

アメリカン・フレンズ・サービス・コミッティー事務局長 マリー・エレン・マクニッシュ（アメリカ）：

今回この場に来ることができたことを、とても光栄に思います。同時に、アメリカ人としては、このような機会をいただきますと、とても謙虚な気持ちになります。なぜ謙虚になるかと言いますと、60年前にアメリカ政府の核使用によって引き起こされた苦しみがあったからであり、またもや世界を核の不安へと陥れる現在のアメリカの外交軍事政策があるからです。

2年前に、アメリカがイラク戦争を起こしたとき、アメリカ国民及び世界の人々は、サダム・フセインは今にも核兵器を保有しかねないから、脅威であると聞かされてきました。悲しいことに、明らかになってきたことは、実際はアメリカの政策こそが、私たちの世界に最も重大な核の脅威を作り出しているということです。

私たちは、30年以上に渡って二大政党の両方の大統領のもとで達成された核軍縮の進展に背を向けてきました。現在のアメリカの政策が、地球規模の安全保障にもたらす影響を見るには、今年5月のNPT再検討会議の破綻を見れば、それで十分です。あまりにも多くの国々が、ブッシュ政権の核政策を見習ってしまっているのです。他の国々の核競争を煽ることは、決して健全な国防政策ではなく、大量破壊兵器は決して平和を作り出すことはできません。それらによってもたらされるのは、恐怖や不信、そして暴力のみです。力は分別と自制がなければ、命取りになるのです。

アメリカ国民と他の世界の人々は、アメリカの政策を逆転させるために力を合わせてもらわなければなりません。本日ここにお集まりの皆様は、いかなる核兵器も使用できるとは見なされないことを非常によくご存じです。核兵器を保有することだけでも、私たちそして子どもたち、私たちの国々、そして私たちの地球の将来にとって容認できることではありません。

アメリカの何百万人もの人々が皆様の味方であり、アメリカの政策に反対していますので、皆さんの倫理に訴える声を心から支持するものです。

アメリカン・フレンズ・サービス・コミッティーは、クエーカー教徒として長年にわたって、戦争の悲惨さと不正を嫌悪してきました。第二次世界大戦勃発時、私たちは日系アメリカ人の抑

留に反対の声を上げましたし、何十年もの間、被爆者をアメリカに招いて証言してもらう支援をしてきました。今年、彼らの生涯に渡る核兵器廃絶への貢献の榮譽をたたえ、アメリカン・フレンズ・サービス・コミッティーは被爆者をノーベル平和賞に推薦しました。

アメリカの平和運動は、それぞれの力に応じてアメリカ政府に対抗し、平和政策が望ましいだけでなく、現実的であることを示すために、あらゆる手を尽くしています。しかし、我々だけで成功することは不可能です。私たちには、アメリカに責任を問い、その道筋を変えさせる世界の倫理的な圧力が必要なのです。皆様には、引き続きアメリカによって先鞭を着けられた拡散の道に反対するよう、皆様方の国の政府に圧力をかけることをお願いいたします。

アメリカ国内の声と世界の声を合わせれば、私たちは絶滅の縁から引き返すことができます。私たちアメリカに住む者に対し、これからも叱咤激励をお願いしたいとともに、私たちは、これだけ多くの皆様によって示された勇気ある模範から強さと励ましを得ます。

命の創造主であり、平和の魂である神の祝福が、目の前の課題に取り組む私たち皆にありますように。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

アメリカン・フレンズ・サービス・コミッティーのマリー・マクニッシュさん、ありがとうございました。

12分休憩を取りたいと思います。そして、あと3名の方の発表をお願いしますが、まず、内藤雅義さん、中村桂子さん、そしてジョアンナ・ウィンチェスターさんをお願いします。そして、フロアからの発言を求めます。ありがとうございました。

— 休憩 —

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

ベルが鳴りましたので、再開します。まず内藤雅義さん、核兵器廃絶市民連絡会の代表の方です。内藤さんの次に中村桂子さん、ピースデポの方をお招きします。内藤さん、どうぞ。

核兵器廃絶市民連絡会代表 内藤雅義（日本）：

議長、どうもありがとうございます。まだコーヒーブレイクが終わっていないようですが、話を始めさせていただきます。

世界各国からおいでいただきまして、どうもありがとうございます。私の話の内容は、原爆体

験の歴史的意味と「2020ビジョン」の日本の運動における意味についてお話をしたいと思います。三つの点について話します。原爆投下の歴史的意味が一つ目、被爆者の体験と日本の核兵器廃絶における役割、三つ目が日本の運動にとっての「2020ビジョン」の意味、この三つです。

核兵器廃絶市民連絡会というのは、東京付近、首都圏の核兵器廃絶のためのネットワークで、今年の2月19日には、広島秋葉市長と長崎伊藤市長をお呼びして、「2020ビジョン」を国内的に推進するための集会を開きました。

具体的な話の内容に入りますが、原爆投下の歴史的意味について、もう一度再確認をしたいと思います。広島、長崎への原爆投下は、人類の歴史を変えたと思います。多くの戦争で残虐なことが数多く行われてきました。しかし、それまでの戦争の残虐性と明らかな違いがあります。それは、人類の文明を破壊し、そして人類の自滅の可能性を生み出した。このような兵器は、これまでありませんでした。その意味で、これまでの兵器の残虐性と明らかに違うと思います。

広島、長崎に原爆が投下された後、ずっと危機は続いています。それはむしろ大きくなっています。そして、今、核保有をする国が増えていることは、多くの方が指摘されたとおりです。今後、核テロを含めて、もし核兵器が使われた場合、恐らく憎悪の連鎖、報復の連鎖によって、人類の絶滅の可能性があるので私には思います。

アインシュタインは、核という宇宙エネルギーの開放は、人類の思考法以外のもの全てを変えてしまったと言いました。国益とパワー・ポリティクスではなく、人類の共存のための新たな思考とこれに基づく政治的システムが必要なのだと私は思います。これが第1点です。

第2点ですが、人類の破滅の可能性を伝える意味での、体験者としての被爆者の証言の重要性です。私自身は被爆者の運動にかなり長い間関与していますが、被爆者の体験を聞いて、二つのことを私は感じます。一つは、地球の最後の光景の目撃者ということです。60年前の明日、8月6日ですが、ここからこの方向だと思いますが、500～600m位の上空で原爆が炸裂しました。大体この辺におられた方は、ほぼ全員亡くなっていると私は思います。

被爆者の証言の中でこういう言葉があって、私は非常に強く印象を受けていますが、「こんなことが起こるならば、戦争は起こらないと思った」。ところがその後、数年後に朝鮮戦争が起きました。非常にショックを受けた。「こんなことが起こるなら、戦争は起こらないと思った」。このような被爆者の体験から導かれる実感を共有することが、僕は非常に大事だろうと思います。

それと、その地球の最後の日の光景の目撃者ということに加えて、何十年にも渡る緩慢な死の恐怖の体験者であり、現在も殺され、かつ遺伝の不安が存在しているという問題です。核兵器は絶対悪であり、絶対に使われてはならない、どのような理由があっても使われてはならないとい

う意見を共有することが大事だと思います。

このような被爆者のメッセージを世界に伝えるうえで、日本政府の役割は非常に重要です。ところが、この点については、幾つかの障害があります。それが、一つはアジアとの関係です。原爆の体験を語ること、訴えることが、日本の戦争の加害者の責任を否定するための宣伝だと思われる状況があります。例えば、1995年に韓国で世論調査が行われたときに、80%以上の人々が「原爆投下は正しかった」という答えが出ています。これは実際にはアメリカより多いという状況があります。この関係を変えていかなければならない。

もう一つは、日本政府が核兵器に依存している限り、核兵器は使われてはならないというメッセージが世界に伝わらないという問題です。日本の安全保障のためには、日本を非核しなければなりません、そのためには、アジアとの関係を改善しなければなりません。ところが、この関係は今あまりいい状況にありません。

そして、もう一つは、日本政府が原爆投下は間違っていたと言わない、こういう問題もあります。これらアジアとアメリカとの関係を変える必要があります。政府の政策を変えるうえで、多くの方々が述べられたように、世論と運動の力が必要です。その日本の運動にとって、「2020ビジョン」というのは、非常に重要だろうと私は思います。

日本の運動のことを知っている方は認識されていると思いますが、残念ながら日本の原水禁運動、平和運動というのは、長い間分裂の歴史があり、一つになってこなかったという問題があります。そのために、日本政府に対する圧力に十分になり切れなかったという問題があると思います。

そういう点を変えるうえで、一つの参考になることがあると思います。一つは、長崎で「地球市民集会」というものが開催されました。アラン・ウェアさんも何度も参加しておられますが、それは、長崎市とNGOが協力して集会を開いて、核兵器廃絶に向けて動くということです。このような自治体とNGOが一緒になると、それまで参加してこなかった多くの人が参加できるという状況が作れるのだらうと思います。

今、歴史の転換点、非常に危機的な状況にあります。その歴史の中で、日本の役割は非常に重要です。そのために、この平和市長会議の訴えた「2020ビジョン」を日本全体に広げる必要があると思います。一緒に闘っていきたいと思います。よろしくお願いします。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

内藤雅義さん、どうもありがとうございました。それでは、次に中村桂子さん、ピースデポの事務局長代行の方にお話を伺います。

ピースデポ事務局長代行 中村桂子（日本）：

議長、ありがとうございます。そして、皆様、こんにちは。日本語でお話しさせていただきたいと思います。

本日は、日本のNGOとして、こうした形でお話しさせていただくことができまして、大変光栄に思っております。実は、私は、今日は議論のところコメントという形で簡単に一言思うところをお話しさせていただこうと思っていましたが、突然発言の勧誘を受けまして大変緊張しております。

さて、私たち日本のNGOは、特に広島、長崎ではなく、東京をベースに仕事をしております。基本的に首都圏のNGOとして活動しています。それで、私たちはこの「2020ビジョン」を支える日本の運動の高まりを生み出したいということで活動しています。それも、昨日の総会でコメントがあったかと思うのですが、日本の札幌市長がここにいらして言われたことが、非常に記憶に残っています。「広島、長崎だけに依存してはいけない。私たち日本の運動というのは、日本国内に広がっていかねばいけない」ということをおっしゃっていました。それはまさに私たちが考えていることで、日本の国内、先ほど内藤さんが私の前にスピーチをされた時にお話しになったように、日本というのは非常に今重要な位置を占めています。その日本のNGOと自治体が手を組んで、この「2020ビジョン」を進めていくことが本当に重要であるとひしひしと感じています。

さて、今朝、私は別の集会で話をする機会がありまして、時々そうしたことを仕事の一環としているのですが、その中で「2020ビジョン」のことを関心ある一般の人に紹介をするということで、概要を話してきました。そうしましたら、その中に被爆者のご高齢の女性の方がいらっしゃったのですが、『2020ビジョン』がこうした形で進んでいるんだよ。今世界ではこんな新しい自治体とNGOと市民が手を取り合って動き出すということが始まっていて、これがすごく世界中に力強く広がっているんだ」という話をしたら、本当に喜んでくださったのです。その方が、「NPTの今回の失敗を受けてとても悲しかった。この先、世界がどうなるのか、道筋が見えなかった。その中で『2020ビジョン』というものがあって、私は本当に先が見通せるような気がした」ということを言ったのです。

私が初めて「2020ビジョン」の話を聞いた時に、この言葉に意味があると教えていただきました。それは、「2020ビジョン」は完全視力というか、先が見通せる、目がよく見えるという意味もあって、「2020」にしたのだと。それで、私がすごく感じているのは、今、日本の運動の中にある種の閉塞感というか、先が見えないというものがある中で、本当にまさに言葉どお

り「2020ビジョン」というのは、先を見通す一筋の光であると感じています。

ただ、そうした中で、ここでディスカッションという形でご相談をしたいと思っていたことは、私たちが日本国内で、特にこうした運動を広げていく時に、本当に市民が支えていく形で「2020ビジョン」を支えていきたいと思っています。私たち日本のNGOは、それを全力で支える用意ができていることをここに申し上げたいと思っています。

私たち以外にも、例えば被爆者で組織されている団体である被団協の皆さんは、「2020ビジョン」を進めるために、一つずつ自分たちの地元の自治体に行って、「2020ビジョン」のことを話したいということも言っています。そのように、私たち日本全国でこの運動を広げていくために、最大限の全力での努力をしたいと思っています。

それを進めていくうえで、ぜひ平和市長会議の皆さんにお願いをしたい、これから進めていきたいということは、やはり私たちNGOと、今日のテーマであるNGOと平和市長会議の市長の連携ということです。情報を共有していく、そして協議していくプロセスを作ることをこれから非常に具体的に進めていきたい。特に、これは日本の中で具体的に進めていきたいと思っています。

例えば、伺いましたところ、今年の秋の国連総会の第1委員会で、特別委員会を作っていくということを聞いていますが、それをどうやって進めていくかということも併せて、また日本国内で自治体に新たに呼びかけていくことも含めて、日本のNGOのエキスパートないしは地域に根差して活動しているNGOに、力を発揮させるような、そうした協議の場を持つのはいかがでしょうか。平和市長会議の担当者の皆さん、それから市長の皆さんとNGOの私たちで、何か定期的にはなくても、何かしらの方法はあると思いますが、話し合いを持っていくようなプロセスをこれから確実に作っていききたいと思っています。

そしてもう1点、先ほどマンチェスターの例がありました、日本にも同じように非核宣言を行った非核宣言自治体が多くあり、そして、平和市長会議の副会長でいらっしゃる長崎市の伊藤一長市長が会長をされている「日本非核宣言自治体協議会」があります。多少減っているかもしれませんが、大体286の自治体が入っていると聞いています。私たちが日本国内でこの「2020ビジョン」を進めていく時に、全くもってこの非核宣言自治体協議会と協力していくことが重要だと思っています。ただ賛同をしていくということだけではなく、より具体的に作り上げていくプロセスを、私たちも共有し、市長の皆さんに頑張ってくださいと思っています。

ですので、今回の総会の中で、こういった形でこういう話が進められているのかということも、日本のNGOとして、大変に興味を持っているところですので、もしお話をいただければと、これはちょっと質問になってしまうのですが思っているところです。

「2020ビジョン」の広がりには本当に大変喜ばしいことだと思っていて、繰り返しますが、私たち日本のNGOも全力を尽くして、皆さんと一緒にやっていきたいと思っています。ぜひこれからも協力し、新しい核のない世界に向けての一步を踏み出していきたいと思います。今日はありがとうございました。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

ピースデポの中村桂子さん、ありがとうございました。具体的な平和市長会議へのご提案もありがとうございます。今日のお話に一致した非常によいご提案だったと思います。市長にも伝えたいと思います。では、ジョアンナ・ウィンチェスターさんです。国連国際交流協調委員会のからの発表です。

国連国際交流協調委員会 ジョアンナ・ウィンチェスター（アメリカ）：

ご出席の皆様、地球市民の皆様、皆様の忍耐に御礼申し上げます。広島平和文化センター、伊藤市長、秋葉市長、広島・長崎市民の皆様、この参加に携わっていらっしゃる全ての団体、ボランティアの皆様、平和と共存の非核世界に向けての努力に御礼申し上げます。車いすに座って、武力の被害者となった多くの方と一緒に、私も発言したいと思います。

私からは、具体的なグローバルな解決策、戦略についてお話をしたいと思います。電子的な形でさらなる情報が必要な方は、後で名刺を下さい。

コミュニケーションをいかに進めるかということですが、この会議全体を平和市長会議の全てのメンバーやその支持者に示すことができるということをお話ししたいのです。ちょっとまだ時差ばけの方にも、説明をしたいと思いました。そして、多くの言語に同時に翻訳することもできるのです。

そこで、皆さんに考えていただきたい問いがあります。コミュニケーションの技術を使うことによって、皆様にコンピュータ・システムを提供したいと思います。もうその資金はでき上がっています。持続的な新しいコンピュータ・システムを作って、それを経済的に運営していきたいと思う方、いらっしゃったら挙手をお願いしたいと思います。

また、新しい技術を簡単に自分のペースで使えるようにしたいと思わないでしょうか。自分のワイヤレスのラップトップや自分のデスクトップから、いろいろ使いたい。そして、双方向性のある形で、わざわざ旅することなく、対面で人と会議に参加したいと思わないでしょうか。そして、どのような規模の人とどこでも話ができるような仕組みが欲しいと思いませんか。

答えをもっともっと私から提供できるものが色々あります。双方向性のあるコミュニケーション

ンの能力として、ライブで皆さんからの反応が欲しいと思いませんか。そして、ワイヤー（有線）でのコミュニケーションがなくても、実際に人々とつながってみたいと思いませんか。また、地域、国、海外における時差を超えたやりとりの能力が欲しいと思いませんか。そして、プロジェクトの資金調達の新たな収入源が欲しいと思いませんか。また、皆さん、自分たちの経費節約になるようなコミュニケーションの能力を欲しいと思いませんか。そして、資金が新たにそこから収入源として得られるのです。

三つの団体が数年前に集まりまして、75のコミュニケーション、媒体、流通、そしてプロダクションの専門家が集まりました。国連、NGO、NPO、政府、教育、その他様々な商業機関が集まり、**Strategy Credentials** というものが強力な原理原則を作りました。すなわち、テレビやコンピューターのデスクトップ、携帯電話、あらゆるところに皆さんのコミュニケーションの能力強化を図りたいと考えます。グローバル・ソリューションというのは、効果的に効率よくコミュニケーションを図るためのものです。そして、自律的な収入源になるわけです。これは自律的な全ての人にとって、常に収入源となるということです。

つまり、戦略の核となるものとしては、私たちがCOREと呼んでいるものがあります。つまり、Cというのはルートの核（**core conduits**）ということです。コミュニケーションや伝達のシステムを全体として理解し、そしてその柔軟性を理解し、主要な対象者に何が必要かを十分に理解することが必要です。

Oはその作用の審査（**operating audits**）ですが、何が必要かをまず明らかにします。そして、全ての主要な観点から支持者、マーケティングや財務のニーズ、収入源などを明らかにし、そしてその運営の仕方を考えます。そして、Rは繰返される収入（**recurring revenue**）です。自律的な形で経済的に成り立つような仕組みを作ります。コスト削減もできますし、そして何度も収入源となり得るわけです。

最後のEはアイデアの交換（**exchange of ideas**）です。支持者から色々なアイデアを集めます。そして、現在やっていることについて問いかけ、これを続けていいかどうかということを考えるわけです。双方向性のある民主的なプロセスがまず必要なわけです。

次に、コア（核）となる部分について考えていきたいと思いますが、幾つかのテクノロジーについて、皆さんご存じのものもあるかもしれませんが、説明します。ICU2というテクノロジーがあります。これは、ライブのシステムで、ライブで対話型のビデオです。この技術は非常に安価で、今でもすぐに使えるものです。ソフトウェア・ベースで、新しい機械は必要ありません。好きなところから好きなところに向かってコミュニケーションができます。一对一、そして同時に8か所話し合いをすることが、スクリーンに全部画面に出るわけです。無線・有線、どちらも

あります。ライブのビデオテレビ会議です。ライブでテレビ会議を週に1回開くということもできる。あるいは、視聴者間でテレビ会議をする。例えば、市長が支持者に対して、あるいは市長がNGOに対して、あらゆるテレビ会議、コミュニケーションができます。

月に好きなだけ使うことができます。216キロのバンド域で会議をしたり、プロジェクトで協力をしたり、支持者と話をする、意見をすぐに求める、そして計画を話したり説明したりできます。ダイヤルアップなどという仕組みも入れています。

また、リアルタイムでかなりのトレーニングができるものもあります。もちろん、これは教育の非核世界、核廃絶、持続可能な開発、平和ということで、色々なトレーニングのコンピュータ・システムを載せています。パソコンでいつでも使えますし、こうした大きな部屋で大きなスクリーンがあれば、そこに出すことができますし、そこでテレビ会議をすることも無料でできます。

こうしたコンピュータ・システムが現在あるわけです。市長の皆さんにこれをご紹介したかったわけで、それ以外の支持者の方にも、これをご紹介したいと思います。バンクーバー市、それから中国のハルピンに最近行きましたが、そこでもこれを導入することで今考えていらっしゃるし、バンクーバーの準備でもこれを使っていらっしゃいます。ありがとうございました。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

ジョアンナ・ウィンチェスターさん、どうもありがとうございました。テクノロジーを通じて、よりよくコミュニケーションを持てる方法についてご紹介いただきました。

それでは、これからご意見、ご質問をお受けしたいと思います。何か新しいアイデア、提案などがあれば、例えば平和市長会議と市民社会の他の部門との協力の提案などについて、何か新しいご意見はありますか。ロウチ大使、どうぞ。マイクをお持ちしますので、お待ちください。

中堅国家構想議長・元カナダ軍縮大使・元カナダ上院議員 ダグラス・ロウチ（カナダ）：

皆様、昨日私は皆様にお話しする機会をいただきました。ですから、そこで申し上げたことをここで繰り返すことはしませんし、長く話すこともしません。ただ、平和市長会議の皆様にはお祝いを申し上げたいと思います。このような場をお持ちになって、色々な考え方を前面に出されているということに敬意を表します。

平和市長会議は、まだ初期の段階にあると言っていいと思います。そして、より力強いネットワークになるための組織化が、今行われようとしています。これは目標として、この次の1年間に加盟都市を2倍に増やすということ、この目標は達成可能だと思います。その勢いが今あると思います。この会議はまさにそれを表しています。

基盤を広げる、拡大するということに加えて、電子的なコミュニケーションの在り方について、今、非常に効果的な形で説明がなされたばかりですが、それをやはり活用すべきであると思います。そうすることによって、舞台が調うというか、魅力が増してくる。平和市長会議が、市民社会を動員する原動力となり、そして政府に圧力をかけていくことができると思います。それによって、平和市長会議は他の組織・団体にも語りかけ、他の組織・団体と協力をしていくことが可能になります。

今朝ほどスーザン・ウォーカーさんから九つの点が指摘されました。5点目として、他の組織と平和市長会議がどのように手を携えていけるのかをお話しになりました。もう既に核軍縮議員ネットワークというものがあり、アラン・ウェアさんがチェアを務めておられますが、そこで議員と市長のネットワークを通じれば、さらに他の団体とも協力を進めていくことができると思います。

そこで、最後に来年について触れておきたいと思います。ワールド・ピース・フォーラムがバンクーバーで開催されるということですが、これは世界各国の組織が集まる場になる大イベントになります。そして、平和市長会議は、今こそその中で強力な役割を果たす機会があります。その場でワークショップを開催したり、イベント、これは皆さんで企画していただくものだと思いますが、いずれにしても、この場でNPT再検討会議が失敗したことによっていかに失望したかということが多く語られておりますけれども、次に、その場を通じてエネルギーをどう結集していけばいいのかという機会になると思います。平和市長会議は、その中でも重要な役割を果たす立場にあると思いますので、皆様にはぜひ平和市長会議の支持基盤を広げ、そして電子的なコミュニケーション手法も駆使しながら、国際的にこの組織の魅力を幅広く伝えていっていただきたいと思います。

そして、間近な目標としましては、バンクーバーのワールド・ピース・フォーラムでそれを明らかに提示していただきたいと思います。そうすることによって、平和市長会議はさらに大きな取り組みに向かっていくことができるはずだと思っています。ありがとうございました。

チェアパーソン（反核国際法律家協会コンサルタント アラン・ウェア）：

ロウチ議員、ありがとうございました。他にコメント、発言のある方、いらっしゃいますでしょうか。どなたの挙手も見られないようですが、他に発言の方がいらっしゃらないということであれば、総括をしたいと思います。

いくつか連絡事項がありますが、まず発言をしてくださった皆様に御礼申し上げます。非常に前向きのたくさんの情報に富んだ、インスピレーションに富んだ考えやアイデアを発言してく

ださいまして御礼申し上げます。それぞれの都市から有益なアイデアを伺うことができ、本国に帰って平和プログラムに反映もできますし、そして平和市長会議の国際行動にも役に立つと思います。

また、今夜アピールに関して起草委員会がありますが、全体会議と分科会の二つの意見もここに反映され、そして明日、それについての発表もいたします。

以上で分科会を終わります。皆様方のご貢献に対して、厚く御礼を申し上げます。よい夜をお過ごしください。明日を楽しみにしたいと思います。ありがとうございました。